

社会委員会通信

23

2006.7.2

発行：横浜港南台教会 社会委員会

〒234-0054

横浜市港南区港南台 7-8-29

Tel：045-833-5323 Fax：045-833-6616

6月の社会委員会学習会は、『映画 日本国憲法』（ビデオ）を鑑賞しました。憲法第2章第9条「戦争の放棄、軍備及び交戦権の否認」の規定を中心に、諸外国の学者、研究者、ジャーナリスト、戦争被害者の方々が、日本国憲法の成立過程、太平洋戦争での地上戦の体験、今日では突出した数の米軍基地を抱えた沖縄の現状、憲法の規定を無視したイラクへの自衛隊派兵と現地での評価、中国・朝鮮半島・東南アジアへの侵略による戦争被害について等、世界から見た日本国憲法について語り、証言をしていました。

ビデオの中で、チャルマーズ・ジョンソン氏が「日本が戦争を引き起こしたことに対する戦争責任の謝罪の表明が憲法9条である」と発言していました。9条を改正して日本が軍隊を持ち、その軍隊が海外に出てゆくことに対して、何の制約もなくなってしまうことが、世界に対して日本が再び戦争の原因をつくるのではないかとの危惧を抱かせると同時に、戦争責任をも放棄してしまうこととなります。戦争を引き起こし、戦争を指導した戦争犯罪者たちが本来負うべき戦争責任を、戦争体験のない世代の日本人は、これからも憲法9条を守ってゆくことで、世界に対して戦争責任の謝罪をしていかなければなりません。これは本来責任を負うべき者が、その責任を負わずに曖昧にしたまま今日に至ったことにあると思います。

ビデオ上映の後、話し合いの時間を持ちました。今あるそれぞれの立場、体験等、貴重な意見を交換することができました。改憲の動きのある昨今、外国から見た平和憲法の持つ意義を学ぶことができた有意義な午後でした。参加者は35名（男性14名、女性21名）でした。

（社会委員長：F.O）



『映画 日本国憲法』について

戦後60年目を迎えた2005年、自衛隊のイラク派兵をきっかけに、憲法についての踏み込んだ議論が始まった。そのニュースは海外、特にアジアの国々でも大きく取り上げられ、関心の高さを示している。

本作では、憲法制定の経緯から平和憲法の意義まで、海外の様々な立場の方々が語っている。憲法とは誰のためのものか、戦争の放棄を誓った前文や第9条をどう考えるのか。「改憲問題は国際問題」、「国歌の権力を抑えるためにつくら

れる、憲法ってそういうものです。』世界的な知の巨人たちが、日本国憲法について語った貴重なインタビュー集である。

出演者は12人。本編中インタビュー登場順にジョン・ダワー(歴史家、マサチューセッツ大学教授)、ノーム・チョムスキー(言語学者、マサチューセッツ大学教授)、C・ダグラス・ラミス(作家、政治学者、元津田塾大学教授)、日高六郎(社会学者、元東京大学教授)、ベアテ・シロタ・ゴードン(憲法草案作成時のGHQスタッフ)、チャルマーズ・ジョンソン(政治学者、元CIA顧問)、ミシェール・キーロ(作家、シリアの民主活動家)、ジョゼーフ・サマーハ(レバノンのアルサフィール新聞編集長)、パン・チュンイ(作家・映画監督)、シン・ヘス(韓国挺身隊問題対策協議会代表)、ハン・ホング(歴史家、聖公会大学教授)、カン・マンギル(尚志大学総長、高麗大学名誉教授)。

以下、数人の話者の発言を一部紹介する。

ジョン・ダワー

「太平洋戦争が終結してから、50年、60年かけて日本の平和を守り続けてきたのは、政府と言うよりもむしろ市民」

C・ダグラス・ラミス

「押しつけ憲法だから問題なのではありません。すべての良い憲法は、たいてい民衆が政府に押

しつけたものです」

ベアテ・シロタ・ゴードン

「平和がいちばん、今世界でいちばん大きい重要な問題ですから、日本がそういう指導者になれば、素晴らしいことになると思います」

チャルマーズ・ジョンソン

「武力行使の放棄を誓った第9条こそが、日本のアジア諸国に対する戦後謝罪だったのです。第9条の放棄は謝罪を放棄することです」

ジョゼーフ・サマーハ

「日本は今、英知をもって協議を絶やさず、常に相手に安心感を与えることが必要です」

班忠義(パン・チュンイ)

「日本人が柳条湖事件で破壊された現地の学校のことなどを何も知らないのに愕然としました」

姜萬吉(カン・マンギル)

「日本が9条を変えれば、各国が軍備を増強するでしょう」

ノーム・チョムスキー

「もし日本がアメリカの体制に加わるなら、これは20世紀への逆戻りどころか野蛮時代への逆戻りでしょう」



ジャン・ユンカーマン監督から

憲法改正は、本来、その国独自の問題である。しかし現時点における改憲は、いやおうなく他

の二つの現実と結びついてくる。一つは日米同盟。もう一つは日本とアジア諸国との関係であ

る。改憲論者は「集団的自衛」といった、曖昧で穏便な言葉を使う。日本は「普通の国家」に生まれ変わるべきだと主張する。しかし、彼らが望んでいるのは、日本が再び戦争を行えるようになることだ。そして、取るに足らないような口実をでっちあげて頻繁に戦争に走り（アメリカ人である私にとっては慙愧に堪えない現実だが）、悲劇的な結末を招くアメリカと足並みを揃えて戦うことなのである。

この映画の製作過程で私たちはいくつかの国を旅した。そして、特に香港とソウルで、歴史が今なおいかにダイナミックに生き、流れ続けているかを知った。戦争は60年前に終わったかもしれない。しかし、人々の戦争体験は生き続けている。日本の「世界市民の一員としての責任」を説く政治家たちが、一方では自国の歴史と向き合い、自分たちの先輩が遂行した戦争の責任を引き受けることを拒絶する。そうした論理は永田町では通用するかもしれないが、近隣国家に対しては意味をもたない。戦争の悲劇と、それを忘れない義務は、条約や時間によってケジメがつくものではないし、終わるものでもない。

歴史の活力には別の面もある。歴史は歩み続け、時の流れはどんどん戦争から遠ざかる。しかし流れゆく先には、紛争の平和的な解決や人権の拡大、つまり日本国憲法の精神があるはずだ。日本国憲法は、それが公布された時点では先駆的な文書であったし、私たちが今回の取材で再確認したように、今も世界中の人々が求めてやまない理想を示している。日本にとって、この時期にそれを捨てることは、歴史の潮流に

逆らう行為だ。

私が初めて日本を訪れたのは、1969年のことである。その頃、ベトナムのジャングルでは50万人以上のアメリカ兵が戦っていた。私は16歳だった。当時のアメリカには徴兵制があったから、いずれは自分も不当で無節操な戦争に参加しなければならないという不安を感じていた。日本の平和憲法は、アメリカにあふれ返る軍国主義と明確な対照をなす、悟りと知恵の極致のように思えた。そのことが、日本にいるということも安らぎを感じられた理由の一つであろうし、私が長い間、日本に住み、日本で子どもたちを育てようと決めた大きな理由ともなっている。将来、私の子どもたちが、平和憲法を持つ国で子どもを育てる道を選択できなくなるかもしれないと考えると、恐ろしくてならない。

平和憲法と、それに守られている人権は、空気のようなものである。私たちはそれらを当然のものと感じ、ことさら考えてみることがない。現在の改憲論議は、私たちに憲法の意味を再び気づかせてくれる。日本に住み、日本で働き、日本で家族を育てているすべての人にとって、それがなぜ、どのようにして書かれたのか、そしてどうすればその精神を守り、広げていけるかを考えるよい契機となる。

憲法を再検討し、評価し直す作業は、社会にとって健全で意味のある試みだ。そのプロセスにおいては、沖縄県辺野古の活動が励ましとなるだろう。沖縄にはすでに38もの米軍基地が存在するのに、この地で更に海上ヘリポートの建設が計画されている。しかしこの小さな村の人たちは、9年もの間、アメリカ軍と日本政府の

権力と対峙し、一步も退かず、戦争に対して「ノー」を唱え続けてきた。世界のなかの日本国憲

法は、そこに存在している。



監督のプロフィール

1952年、米国ミルウォーキーに生まれる。スタンフォード大学東洋文学語科卒業。ウィスコンシン大学大学院修士課程終了。国際政治、経済、労働運動、環境問題などの分野でジャーナリストとして活躍。

そのかたわら、映画の世界へも道を拓く。1988年、映画『HELLFIRE 劫火』を監督。米国アカデミー賞記録映画部門にノミネート。9.11のテロ後にノーム・チョムスキーにインタビューし

た『チョムスキー9.11』(2002年)は世界十数カ国で翻訳・上映され、現在も各国で劇場公開が続いている。他に、与那国のカジキ捕りの老漁師を描いた『老人と海』(1990年)、エミー賞受賞作『夢窓~庭との語らい』(1992年)、ミシシッピ川沿いに旅しながら、地元のミュージシャンとの交流や彼らの音楽活動を記録した「The Mississippi: River of Song」(1999年)など、現在も日米両国を拠点に活動を続ける。



製作ノートから 山上徹二郎(プロデューサー)

この『映画 日本国憲法』は、2002年に製作した『チョムスキー9.11』の続編という位置づけで企画した。

2001年の9.11同時多発テロを受けて始まった、アメリカの孤独で強引な他国への武力行使と、それをチャンスと捉えアメリカに追随して早々に自衛隊の海外派兵へ踏み出した日本政府のやり方に、強い怒りとともに脱力感を感じていた。アメリカの一国主義が、世界中にテロを広げるのではないかと。日本はこのまま“憲法改正”へと進み、軍事大国化への歯止めがなくなるのではないかと。当たり前のように思っていた平和を志向する社会的な意志が、一挙に崩れ始

めたように思った。

そうした中で、今私に何ができるのか、という問いから始めた。一人の個人として声を挙げる。そして、個人としてだけでなく自分が属している社会、例えば地域や職場や職業という意味だが、そこで出来ることを探す。映画プロデューサーである私にとって、それは映画を制作することだった。

この映画で伝えたかったのは、知識や情報ではない。映画の中で、明快な意志をもって発言する知識人たちの態度に、連帯という言葉を出してほしいと思った。それは、この映画制作を通して私自身が脱力感から抜け出すきっかけ

けとなったものでもあった。平和を守ろうと行動する人たちを支え勇気づけるのは、何よりも

人々の連帯だと思っている。



ビデオの感想・ご意見



Y.O: 私の孫が岩手の田舎に住んでいた小学校一年生の頃の話です。母親は中学校の先生で、父親は大学の先生ですから、家庭でいろいろな話をしていたと思うのです。その子がある日、「僕は自衛隊に入りたい」と言い出したのです。

そんな教育はした覚えはないのに、という思いにかられておりましたら、その子の受け持ちの先生から、「家庭ではどういう方針か知りませんが、学校では父兄が自衛隊員の子がいますから、自衛隊のことにはあまり触れないでほしい」という連絡があったそうです。

私も横浜にいろいろな情報を得ますが、田舎の一年生が一人しかいないような小学校でも、政府の手が伸びて、敏感に響いてくるのだと感じて怖くなったというか、恐ろしいものを感じました。私たちが9条をきちんと守らなければいけないという態度を示していかなければ、次の世代の子どもたちを守れないということを強く感じました。

H.N: 「洋光台九条の会」の事務局の一員です。この『映画 日本国憲法』を洋光台でも8月に地域ケアプラザで上映する予定です。この教会にも「洋光台九条の会」にご賛同いただいている方が何人もいらっしゃるの、

大変心強く思っております。これからもご協力をよろしくお願いいたします。

今日のビデオで、ちょっと引っ掛かったことがあります。著書にサインしていたチャルマーズ・ジョンソン氏がインタビューの最後に、「まあ日本が軍事大国化することはないですから」と言っていたことです。私は既に日本は軍事大国化していると思います。航空母艦や核兵器を持たなくても、既にイージス艦やミサイルを持ち、北朝鮮の軍事費の35倍とも言われている年間防衛費4兆8千億もある国が、世界の超軍事大国アメリカと同盟を結んでいるのです。脅威を感じるのはどちらの側でしょうか。ビデオの中で東アジアの国を含め、心配はしていると言うけれども軍事大国化はしないだろうという言い方にはちょっと抵抗がありました。

最近のニュースで、沖縄の米軍がグアムに移転する費用が3兆円とも言われていますが、グアムに移転するアメリカの家族の住宅が1戸8,500万円もするというのです。そんな住宅を建ててやるなんて、どう考えても許せないし、それならば私たちのためにもっと良い老人ホームでも造ってほしいと思いました。

R.S: 私はこのような所で発言するほど社会

問題や憲法などに関心を持っていなかったのですが、戦後世代なので何となく憲法は空気みたいに当たり前だと思っていました。ところが改正に向けている色々な法案が用意されたりで、今年の憲法記念日の前には、新聞に載っていた憲法についての記事を例年になく熱心に読みました。そして、にわかには憲法について興味を持ちました。

今日のビデオにも憲法が作られたときの様子がありました。白洲次郎さんの伝記を読むと、マッカーサーが皇居を見下ろす第一生命ビルで占領下に原案を作った時、日本政府側は、天皇制を守ることと天皇が戦争責任を免れることだけしか考えていなくて、そのためには何でも呑むといういい加減さと、時を稼ぐということしか考えなかったようです。

ビデオでは、民間がちゃんとしたものを用意していたという話がありました。伝記を読む限り、政府側の人には主権在民や男女同権の理念や考え方などがなかったようです。だから、押しつけられたと言うかもしれないけれど、憲法を日本政府が作ったとしたら、そういう精神を盛り込んだものはできなかったと思います。

今の共謀罪もそうですが、憲法の時もとにかく成立させて変えてしまおうという動きがあったようです。でも、それが政府の狙ったように変えられなかったのは、平和を望む国民の方がたくさん議席をとったからでした。鳩山一郎や岸信介も変えようと思ったけれども変えられなかったのは、国民が守ったからでした。今の時代は、ちょっと危ないと思

います。劇場型の選挙をするようになっていたりしているので、みんなもう少し考えなければいけないと思っています

K.A:このビデオを家で何度も見ようとしたのですが、そのたびに挫折してしまいました。やはりみんなと一緒に見るのがいいと思いました。例えば9条のことや、平和、戦争のことなど、1人で考えるだけではなくて、教会や、今全国で展開されている「九条の会」とか、みんなで取り組み、考えていくことが大事で、今日改めてこういう場が与えられ、学ぶことができ良かったと思います。

港南台教会が社会派と言われたことにちょっと驚きましたが、教会は社会と無縁であってはならないと思います。憲法は大きな問題ですが、小さいことを少しずつでも教会という場から発信したり、私たちが受け止めて奉仕することが、これから求められていくのではないかと思います。今日は若い人も参加していましたし、みんなで見られたことは、本当に良かったと思っています。

T.K:日本の憲法なのに、この映画を作ったのは日本人ではありません。そのことを重く受け止めなければいけないのではないかと思います。



Y.O:今日は「日本国憲法」のビデオを見て、

憲法9条の素晴らしさを改めている色々な角度から学ぶことが出来ました。

今の憲法は主権在民です。「戦争のできる国」ではなく「平和を守り抜く国」を私たち民衆の方から政府に押しつけていくことが必要だと分かりました。

もし戦争を起こすような事態になるのだったら、それは私たち一人ひとりの責任でもあるということを感じて、憲法改正問題に向き合いたいと思いました。

M.K: 私は終戦2週間前に召集され、満州の新京に動員され、そこで終戦を迎えました。今度は帰れると思っていたら、列車に乗せられて、シベリアの方向に向かって行ったのです。国境を越え、一昼夜ぐらい貨車に揺られ、バイカル湖から南下してモンゴルに送られました。当時私たちはどこで戦って死ぬのかと思っていたのに、関東軍の幹部たちは、動物も一緒に飛行機でさっさと満州から引き揚げてしまったのです。

開拓に行っていた人たちが引き揚げるときも、乗り物がなければ何十キロも何百キロも歩かなければなりません。途中中国人から略奪されたり、子どもを殺されたり、いっそ自分たちで殺して避難しようとした人たちがいっぱいいました。かわいそうだと思うけれども、どうしようもなく、逃げるに逃げられない状態でした。ところが私たちの中隊長に「無駄に逃亡するようなことを考えないで、必ず帰れる時期が来るから、それまで辛抱せよ」と言われ、正直にそれを実行しました。

国の偉い人たちはさっさと逃げて帰り、日本に帰ってきてから絞首刑になったりしたようですが、そういう人たちが靖国神社に祀られていることは、アジアの人たちには許せないのだと思います。韓国や中国の人たちがどんな目に遭っているか、私たちは実際にそれを見てきているのです。本当に日本軍の兵隊たちは、略奪や暴行を繰り返し、最後には殺してしまうのを実際に見てきて、何でそういうことをしなければならないのか、本当に情けなくて、私は日本の国に生まれたのが間違いだったとも思いました。

そういう思いをして、やっと日本に帰されたわけです。無事に帰れたのも、俘虜の身分としては一番良い待遇を受けていたのも、仕事や作業の関係で恵まれていたおかげでした。

現在この歳になっても、その当時の悲しい思いがいっぱいあります。本当に憲法改正などあってはならないことだと思います。帰ってきた当時は保安隊、それから警察予備隊と何度か名称を変えながら大きくなって、最後には他国の支援をするような立場になって、これで9条を改正すれば、また戦争を始めるのではないかという不安があります。

H.O: 今日ビデオを見ながら、これはこの場でだけ見て終わってしまったら、果たして周りの人たちに上手に伝えられるかということはずっと考えていました。このビデオを借りられたら、どこどこに配信したらいいかと考えていました。

アメリカにいる弟は、月に1回自宅で30

人ほどの勉強会を開いていますし、いくつかそういう会を作っているようです。そこにもこのビデオを届けたらどうかと思っています。

去年「九条の会」がクローズアップされてきた頃、今日のビデオに出てきたベアテさんの『ベアテの贈り物』という映画を岩波ホールで見ました。アメリカの女性でも、日本の

土台を造るために手を貸してくださったのだと感銘を受けました。

K.N: 私は「上郷九条の会」に入って、光明寺の北条さんというお寺さんと仲良くやっています。「九条の会」はキリスト教もお寺さんとも関係なく頑張っております。



参 考 文 献

- 『映画 日本国憲法』読本』 1,470 円 発行：フォイル
映画で紹介しきれなかったジョン・ダワー、ノーム・チョムスキー、ベアテ・シロタ・ゴードン、チャルマーズ・ジョンソン、日高六郎、ハン・ホングのインタビュー全文に加え、採録シナリオや憲法資料までを網羅した完全保存版
- 『やさしいことばで日本国憲法』 新訳条文 + 英文憲法 + 憲法全文 For peace-loving people
池田香代子訳、C・ダグラス・ラミス監修・解説 1,000 円 発行：マガジンハウス
国民主権、世界平和、基本的人権・・・憲法の最も大切な条文（前文、1・9 条、3・9・10 章）を英文憲法をもとに中学生でも理解できるよう新たに訳出
- 『1945 年のクリスマス』 日本国憲法に「男女平等」を書いた女性の自伝
ベアテ・シロタ・ゴードン著 1,835 円 発行：柏書房
- 『反戦平和の手帖』 あなたしかできない新しいこと
C・ダグラス・ラミスと喜納昌吉の対談集 定価：735 円 発行：集英社新書
『花～すべての人の心に花を～』の喜納昌吉と『世界がもし 100 人の村だったら』の対訳者ラミスが提唱する、一般常識としての反戦平和

社会委員会からのお知らせ

8月6日(日)に平和学習会を開催します。千代田教会牧師の四竈揚牧師を講師としてお招きし、講演していただきます。詳細は7月上旬にお知らせします。他教会からのご参加も歓迎します。

今回上映したビデオ『映画 日本国憲法』は社会委員会で購入しました。教会のビデオ棚に置いてありますので、どうぞご鑑賞下さい。